

いつみきいちょう 逸身喜一郎著「ラテン語のはなし—^{つうどく}通読できるラテン語^{ごぶんぼう}文法—」(I)、大修館書店、2000 年 12 月 15 日刊を読む

私は愛す。君は愛す——動詞の現在形

1. イリーナ「姉さんはへとへとなのよ。少し休ませてあげたらいいわにいさん」
 クリィギン「いま行くよ。……わたしの大事な、すばらしい奥さん……。わたしは愛しているよ、
 かけがえのない、わたしの奥さん……」
 マーシャ(憤然と)「amo, amas, amat, amamus, amatis, amant」
 ——チャーホフ「三人姉妹」第 3 幕(神西清訳)
2. ラテン語の動詞の学習は<愛する>の活用を覚えることから始まる。<憎む>とか<殺す>だと、いくらなんでも教育上まずいこともあるけれども、意味はともかくとして、<愛する>ならばその形自体が「右代表」となるに都合よくできているからである。あとで詳しく説明する文法用語を先取りすると、不定詞が-are で終わる動詞、つまり「第 1 活用」の動詞であることが重要だし、さらに他動詞であって受動態の形をももっていることが、動詞の変化丸暗記の最初の例には必須となる。
3. amare<愛する>がそうした条件を満たす動詞の代表になったのは、文法教育の歴史上、相当に古い。確認していないのでわずかな記憶でいうが、すでにルネッサンス期の文法書で、動詞変化の表にこの動詞が見本を提供していた。
4. というわけで、19 世紀におけるラテン語の第一歩は、当然、「私は愛する、あなたは愛する、…」と唱えることである。教育をうけたにもかかわらず田舎暮らしから逃れられないチャーホフ描くところの三人姉妹、モスクワへ行けば無知蒙昧な連中に取り囲まれた生活を一新できると思い込んでいる三人姉妹が、おそらく少女だった頃にラテン語を学んだのは当然の成り行きであった。と
 いう彼女たちがいま、ラテン語の書物を読んでいるとは思えない。初級文法で終わったのだろう。「挫折」とはいうまい。
5. 実は今回『三人姉妹』を読み返してみて、いくつもの記憶違いを発見した。そのひとつはラテン語に関連する。私は「末の妹イリーナなどはラテン語までも学んだにもかかわらず、こんな田舎にいては何の役にも立たない」という趣旨のせりふがあるはずだ、と思い込んでいたのである。
6. ところがそれはラテン語ではなくイタリア語であった。イリーナは(フランス語は当然としておそらくドイツ語、英語も学んだうえに)何とイタリア語をも学んでいたのである。ラテン語はイリーナに限らず姉妹たちみなが教わったのだろう。だからこそマーシャが「うざったい」夫に amo, amas, amat, ...を並べ立てることも可能なわけである。
7. 同時にこのせりふの存在は、19 世紀末のロシアの劇場でチャーホフの芝居を見るような観客ならば、amo, amas, amat, ...の意味のみならず、自身、amo, amas, amat, ...と唱えさせられた経験があっ

たことをうかがわせる。さもないとこの場の意味が通じない。さらにいえばこのせりふから、amo, amas, amat, ...と何度も復唱させられる、やりきれなさまでも受けとめられる人が、チャーホフの理想としている観客であったかもしれない。

8. ラテン語動詞活用の練習が amo, amas, amat, ...だったことにならって、ロマンス諸語でもこの語に対応する単語から、動詞の練習を始めるのが伝統であった。もっともフランス語の

	単 数	複 数
1 人称 2 人称 3 人称	j'aime tu aimes il aime	nous aimons vous aimez ils aiment

は、エリジオンやリエゾンの説明が必要になるし、フランス語では他動詞である必要はないどころか、むしろ目的語のない文章は不自然で練習問題にふさわしくないから(かといって目的語を入れるとなると代名詞その他、また余計な説明が増えるから)、最近の教科書では他の自動詞に取って代わられたそうである。私は実際に aimer で習ったけれど。

9. amo, amas, amat は、〈愛する〉を意味する動詞の 1 人称、2 人称、3 人称それぞれの単数形である。複数形と一緒に表にすると、

・動詞の活用・現在：amo の場合

	単 数	複 数
1 人称 2 人称 3 人称	amo amas amat	amamus amatis amant

となる。

10. 2 人称・3 人称単数と 3 人称複数の人称語尾の-s, -t, -nt は(そして直説法現在では見えなくなってしまっているが、他のところで現れる 1 人称単数の語尾-m も)子音だけでできている。それに対して複数形の 1 人称と 2 人称では amamus, amatis と、語尾が長くなる。つまり人称語尾-mus, -tis だけで 1 シラブルを構成する。そこでこの 2 カ所ではアクセントもずれてきて、ámo, ámas, ámat, ámant に対し amámus, amátis となる。
11. この傾向はちゃんとフランス語やイタリア語に、いまなお保存されている。フランス語では複数 1 人称・2 人称だけで nous aimons, vous aimez と長い語尾になってそこにアクセントが落ちるし、イタリア語では単数各人称と複数 3 人称で ámo, ámi, áma, ámano と語頭の a にアクセントがあるが、それに反して複数 1 人称・2 人称で amíamo, amáte とアクセントはうしろの a にまわる。
12. 主語が「私」か「あなた」かそれ以外かで動詞の形を変えるのは、インド・ヨーロッパ語族の大きな特徴のひとつである。そして活用形を、

amo, amas, amat, amamus, amatis, amant

のように、まず人称の順に、ついで複数、と並べるのは、ヨーロッパ諸言語に踏襲された、ラテン

語文法に由来する伝統である。

13. 動詞を人称によって変化させなくてはならない必然性はどこにもないと、日本語を使う私たちは思う。そもそも人称の別だってずいぶん、恣意的ではなかろうか。「3人称単数の s」は英語を学ぶ子供にとって最初のつまずきの石である。しかしヨーロッパ人には人称変化は自明の事実である。
14. 余談であるが、〈愛する〉という、なんとも生硬なことばしか、英語の *to love*, フランス語の *aimer*, ドイツ語の *lieben* などなどにあてるものがない、というのも言語教育の難しさだろう、と想像する。日本語でもっとも自然な表現の「(僕は)君が好きだ」の「好きだ」は、なにしろ動詞ではないのだから(形容動詞という範疇があるのか否か、という問いにパスする)。
15. フランス語は *j'aime* と、主語の *je* をおく。英語の *I love* もそうである。しかしラテン語では通常、主語としての人称代名詞を必要としない。強調や対比の要がある場合に備え、1・2人称に *ego*, *tu*, *nos*, *vos* という単語があるにはあるが、語尾で十分に明示されるからである。3人称には、何か主語になる名詞があればそれを主格にしてやればよいし、指示代名詞を使うこともある。もちろん主語が明確な場合には省略可能である。
16. 近代ヨーロッパ語ではフランス語の *aimer*、ドイツ語の *lieben* のように、不定詞が辞書の見だしの形になっている。ほとんど活用形を失ってしまった英語だって、実のところそうである。*am* ではなく *be* でひく。しかしラテン語では、不定詞で辞書はひけない。*amo* のように、1人称単数、厳密に言えば、「直説法・能動態・現在・1人称・単数形」で動詞を代表させる。
17. 「直説法・能動態・現在・1人称・単数形」のうしろ2つ、「人称」と「数」については説明がずんでいいる。「現在」というのは「時制」のひとつである。動詞が「現在」や「過去」という「時制」の違いを示すのに、語尾変化に頼るというのは、あれほど変化を忘れてしまった英語ですら、いまなお残している特徴である。ラテン語には時制が6つある。これについてはあとで説明する。
18. 「能動態」というのは「受動態」に対する表現である。「受動態」を平たくいえば「受身」。〈愛する〉を例にとれば、〈愛する〉が「能動態」であるのに対して、〈愛される〉が「受動態」である。
19. 英語では *I am loved*. のように「受動態」は *be* 動詞と過去分詞との組み合わせで表現するけれども、ラテン語では「受動態」もまた語尾変化で示す。だから変化形が増える。つまり、人称語尾には「能動態」用のシリーズと「受動態」用のシリーズとがあって、それを入れ替えることで「能動」になったり「受動」になったりする。これもあとであつかう。
20. フランス語やドイツ語には「接続法」というのがあって、たいてい、文法の教科書の最後のほうになって習うことになっている。しかしその実、「接続法」は結構、頻繁に使われる形である。ラテン語にも「接続法」が発達している(正確には、ラテン語の発達した接続法の用法をもとにして近代諸言語の接続法が完備した、というべきである)。「接続法」に対して普通の動詞の形を「直説法」という。だから *amo* を正確に表現しようとする「直説法・能動態・現在・1人称・単数形」

といわなければならない。

21. つまり以上 5 つの変化要因だけでも、

$$2(\text{法}) \times 2(\text{態}) \times 6(\text{時制}) \times 3(\text{人称}) \times 2(\text{数}) = 144$$

の形があり、その他にも命令形や不定詞、あるいはそれ自体が性・数・格変化をする分詞までいれると、ひとつの動詞がいったいいくつの形になるやら、計算するのもいやになる。それほどラテン語の変化ははげしい(もうひとつ厄介なのが、動詞 **amo**〈愛する〉と名詞 **amor**〈愛〉のように、品詞を越えて似通った単語があることである)。といっても変化には規則がある。ラテン語の動詞変化は規則をおさえながら順にたどれば、決して恐ろしくはない。

22. **amo** ではみえなくなっているが、**am-a-s** のように各活用形は 3 つに分析できる。**am-**は意味を決めている語根である。真ん中の **a**は幹母音という。さらに語根と幹母音とをあわせた **ama-**が現在幹(現在形の語幹、縮めて現在幹)であって、末尾の**-s**が人称語尾である。

am — a — s
語根 幹母音 人称語尾
└─現在幹─┘

23. 語根・幹母音・人称語尾という区別は、**amo** だけをみているぶんにはたいして意味はないが、動詞体系全体、ならびにギリシャ語やサンスクリットといったほかのインド・ヨーロッパ諸言語の動詞体系の理解に有益である。

24. ラテン語の動詞の現在形は、不定詞の幹母音の種類をもとに 4 つの活用に分ける。

幹母音が a なら第 1 活用 **amo, amāre**〈愛する〉
長い e なら第 2 活用 **video, vidēre**〈見る〉
短い e なら第 3 活用 **ago, agere**〈なす〉
 capio, capere〈捕まえる〉
長い i なら第 4 活用 **audio, audire**〈聞く〉

・動詞の活用：現在

	第 1 活用	第 2 活用	第 3 活用	第 3 活用	第 4 活用
1・単	〈愛する〉 amo	〈見る〉 video	〈なす〉 ago	〈捕まえる〉 capio	〈聞く〉 audio
2・単	amas	vides	agis	capis	audis
3・単	amat	videt	agit	capit	audit
1・複	amamus	videmus	agimus	capimus	audimus
2・複	amatis	videtis	agitis	capitis	auditis
3・複	amant	vident	agunt	capiunt	audiunt

である。第 3 活用には 1 人称単数が **ago** のように**-o** で終わる「多数派」と、**capio** のように**-io** で終わる「少数派」がある。「多数派」と「少数派」とでは、ところどころ変化形が違う。

25. そしてごくわずかな特殊な動詞を除いて、活用の種類はこれで全部である。この点、現在形だけでもいくつものヴァリエーションのあるフランス語やイタリア語、あるいは **ich fahre, ich sehe** に対

して du fährst, er fährt, du siehst, er sieht と、2 人称・3 人称単数で母音を変える重要な動詞が少なくないドイツ語に比べて、少なくとも現在形について覚えなくてはならないことははるかに少ない。

26. それぞれの活用形を上表に並べておく。一見して、語根・幹母音・人称語尾という区分が有効なことがみてとれよう。

27. 長い e の第 2 活用と、短い e の第 3 活用はしっかり区別されなくてはならない。〈ウィデーレ〉に対して〈アゲレ〉・〈カペレ〉である。アクセントも違う。agere の場合、語頭の a にある。アクセントを少々間違えるのはしょうがないとしても、〈アゲーレ〉・〈カペーレ〉はものすごく恥ずかしい。

P45 ~ 52

[コメント]

ロマンス語とよばれるスペイン語、イタリア語、ポルトガル語、ルーマニア語、そしてフランス語などの原形となったラテン語を学ぶことは、ロマンス語の仲間である英語やドイツ語を学ぶことにも役立つと言われる。ではどのようにラテン語を学んだらよいか。ラテン語の入門書として、逸身先生の本書は最適。まずは、amos からスタートしようではないか。

— 2014 年 1 月 9 日 林 明夫記 —